



動物介在介入：動物と分かちあう健康と幸せ

動物介在介入とは

伴侶動物（コンパニオンアニマル）は、人の仲間として動物に配慮した関係を築くことを意識した呼び方です。伴侶動物は、人の生活の質の向上に貢献してくれます。動物とのふれあいには、血圧の降下や医療受診回数の減少といった身体的効果、不安の軽減や自尊心の高揚などの心理的効果、会話の促進や人間関係の改善などの社会的効果があります。動物介在介入（アニマルセラピー）は、人の心身の健康増進、治療、教育などのために伴侶動物を導入して効果をあげる試みです。動物介在介入では、適性のある介在動物が患者を慰問したり、リハビリで日常生活動作を促して治療効果を上げたりします。

なぜ動物は効くのか

動物介在介入の科学的研究は、ほんの50年程前に始まりました。現在は、心理学、医学、看護学、福祉学、教育学、動物行動学、獣医学、社会学など様々な分野から研究が行われています。しかし人類は、古代から動物と意思疎通しながら助け合って共生してきました。

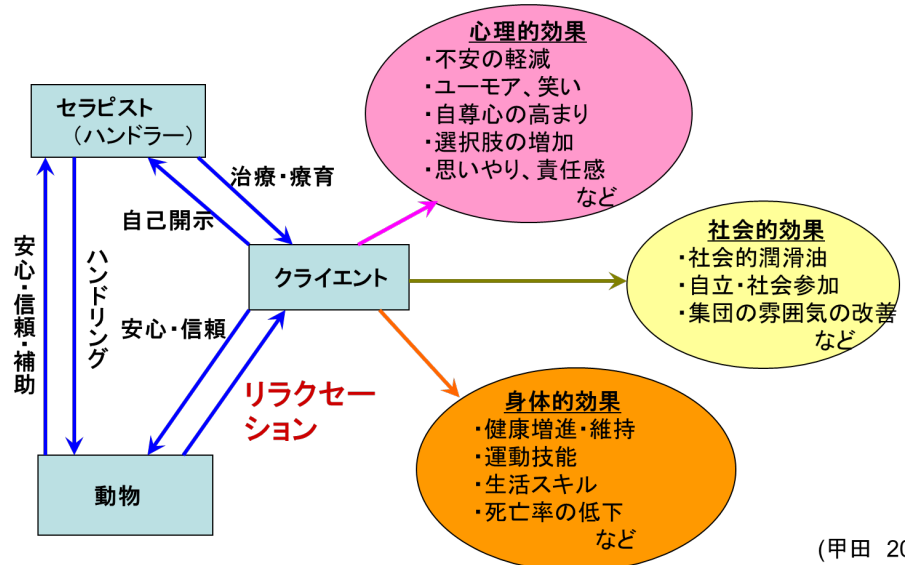
人は生得的に生命や自然を好むとされるバイオフィリア（生命愛）仮説が提唱されています。伴侶動物は、身近で自然を感じる存在で、人は、動物が無邪気に遊び、寝食する姿に接すると、今いる環境が安全と認識し安らぎます。介在動物の仕事の基盤は、快です。人は動物にありたけの愛情を注ぎ、正の強化によって褒めながら育成します。

接触動物である人と伴侶動物は、仲間と身を寄せ合うと安心するため、ふれあいで双方が益を得ます。言語や視線や身振りによる複雑な対人コミュニケーションが苦手でも、動物を撫で、抱いたりして動物と基本的な意思疎通ができます。種間コミュニケーションは、完璧な信号を相手に送れなくても許容範囲は広いです。

今、なぜ動物なのか

動物介在介入は、福祉型社会への転換に伴い普及してきました。医療の発展と普及により、多くの疾病が治癒できるようになりました。様々な工業製品の開発で、暮らしは便利に豊かになりました。しかし、人々の心や人間関係は、必ずしも豊かにはならなかったのです。動物介在介入は、開発と効率化によって自然と切り離され、競争や孤立化、義務や責任に疲れた現代人が、生物としての自然との結びつきを再構築し、本来の勤労のあり方や生活の喜び、本来の人間関係を取り戻そうとする穏便なレジスタンスとも言えます。そこでは、共に支え合って未知の時代を生きる人と動物の新たな関係が見えます。

文献：甲田菜穂子 2011. 身近な動物との関わりから学べること 教育と医学 697(7)：86-92.



(甲田 2011)

図(左) モルモットによる介在介入の様子。(右)：動物介在介入の効果と相互作用。